

中部の

エネルギーを 築いた

人々

信州の水力発電事業を推進した 小坂善之助・小坂順造

長野電灯株式会社は、1897(明治30)年に設立(資本金：45,000円)され、初代社長に小坂善之助が就任した。その翌年、長野市内を流れる裾花川に信州で最初の茂菅発電所(当初出力：60kW)を建設し、この年に長野市となった善光寺、大門付近に供給を開始した。続いて1900(明治33)年に2号機(出力60kW)を増設し、1905(明治38)年、上流に第二発電所として芋井発電所(当初出力：250kW)を新たに完工した。現在、旧長野電灯の本社(写真1)があった大門町に「長野電灯発祥の地」の碑、旧茂菅発電所の導水管跡に「ここ信州電気発祥の地」のレリーフ(写真2)がある。この茂菅発電所は、1936(昭和11)年に里島発電所(当初出力：3,280kW)の建設で休止され、更に芋井発電所は1968(昭和43)年に閉鎖した。

長野電灯に遅れること5年、1903(明治36)年に製糸王といわれた越寿三郎が信濃電気株式会社を須坂市に設立(資本金：20万円)した。そして営業区域が郡部から長野市に広がるにつれて両社との間で顧客の奪い合いが展開された。この競争は、1910(明治43)年に長野県知事により和解し、長野市内は長野電灯が供給することになった。その後、隣接の上田電灯を合併すると共に、北信地方に進出し新潟県境地方へ水力発電所を造っていった。さらに、豊富で低廉な余剰電力を利用して、カーバイド製造を開始したのに始まり、1926(大正15)年には、日本窒素と共に信越窒素肥料株式会社を設立(現在の信越化学株式会社)し、化学工業分野にも進出した。

その後、長野電灯は伊那・佐久・西毛支社を開設した。このうち伊那支社管内に、1913(大正2)年、小黒川発電所(当初出力：250kW)を建設した。そして伊那町、赤穂村を



写真1：長野電灯・長野電気株式会社時代の本社、中部配電・中部電力株式会社時代の営業所(大正7年から昭和32年まで4代にわたり営業)



写真2：水圧鉄管固定台跡に刻まれた「ここ信州、電気発祥の地」のレリーフ

中心に供給したが、伊那電車軌道会社が設立されたのを機に事業を譲渡し撤退した。

小坂善之助の長男順造が、1923(大正12)年に長野電灯の社長に就任して以降、佐久地方や県境を越えて群馬県にも進出し、競争時代にふさわしい発展を遂げていった。そして、西毛電気株式会社、小日向水力株式会社、新川電力株式会社、丹生電力株式会社、東信電気株式会社を次々に併合し、供給範囲を拡大していった。長野電灯時代に建設された水力発電所は、資料1のとおりである。そのうち八那池第一(270kW)・第二(450kW)・小黒(1,100kW)・茂沢(1,600kW)・長倉(520kW)・松原(450kW)・広戸(1,500kW)・平穂

第一(10,200kW)・第二(5,000kW)・第三(480kW)・里島(3,500kW)の11か所・25,070kWが現役で運転されている。

一方、長野電灯と信濃電気はライバル意識を持ちながらも協調関係を保ち、1924(大正13)年に共同出資で梓川電力を設立し、霞沢発電所(当初出力：31,100kW)を運開させた。この建設工事に伴い取水源の大正池まで工事関連の資材を搬入する目的で釜トンネルを開削した。このトンネルは、1933(昭和8)年に長野県に寄付され、上高地までの県道として利用された。

1929(昭和4)年の世界大恐慌の影響を受け、越寿三郎が経営していた信濃電気、信越窒素肥料を小坂順造に委譲した。そして両社は、1937(昭和12)年に対等合併し長野電気(株)となった。

1 政治家・実業家・信濃毎日新聞としての小坂善之助(写真3)

小坂善之助は、1853(嘉永6)年に長野市郊外、里村山村の名主の豪家に生まれた。1881(明治14)年に長野県議会議員となり、1890(明治23)年、国会開設時の第1回衆議院議員に初当選した。その後3期連続当選したが、一旦政界から身を引いた。1904年、政友会から出馬し4度目の当選を果たしたが、翌年脳溢血で倒れたのを機に引退した。

政界にあっては日本の将来を見つめ、信濃銀行の設立(1899年)に尽力した。更に信濃毎



写真3：
長野電灯(株)初代社長
小坂善之助

日新聞の2代目社長に就任(1898年)し、社長といえども紙面に干渉せずの編集方針で臨み、経営の基礎を確立した。1911(明治44)年に長男の順造に社長を委譲した。

善之助は、電力、金融、言論という主要3大事業を興し、地元長野の発展のために力を注ぎ、1913(大正2)年、60歳で亡くなった。

2 日本の電力再編成や政財界に貢献した小坂順造(写真4)

小坂順造は、1881(明治14)年、長野市で小坂善之助の長男として生まれた。1904(明治37)年、一橋大学の前身の東京高等商業学校を卒業し、日本銀行に勤めた。1908(明治41)年に父の事業を継承するため同行を退職し、信濃銀行取締役(1908年)、信濃毎日新聞社長(1911年)、長野電灯社長(1923年)などに就任した。

また、父と同じく1912年から1932(昭和7)年までの間に衆議院議員に6回当選し、1929年に拓務省(後の樺太庁)政務次官を歴任した。1950(昭和25)年には、GHQの方針で分割が決まっていた日本発送電の最後の総裁に就任した。また1954(昭和29)年に電源開発(株)の初代総裁に就任し、1960(昭和35)年、享年80歳で没した。

小坂善之助、順造親子は電気事業の発展に寄与したのみならず、新聞・銀行・政治家などとして活躍し、地元に大きく貢献した。

(寺澤安正)



写真4：
長野電灯(株)社長
小坂順造

資料1：長野電灯時代の発電所(明治31～昭和12)

発電所名	運転開始年	出力(当初)	備考(所在地等)
茂菅	1898(明治31)	60	明治33年2号機60kW増設、長野市茂菅
芋井	1905(明治38)	250	明治41年2号機増設300kW、長野市芋井
高芝	1911(明治44)	120	旧・西毛電気、群馬県碓氷郡松井田町
八那池第一	1912(大正1)	270	長野県南佐久郡御代田町
小黒	1913(大正2)	250	伊那市伊那
坂本	1915(大正4)	50	旧・西毛電気、群馬県碓氷郡松井田町
八那池第二	1919(大正8)	450	長野県南佐久郡御代田町
茂沢	1920(大正9)	1,600	長野県北佐久郡小海町
長倉	1924(大正13)	520	長野県軽井沢町
松原	1925(大正14)	450	長野県南佐久郡御代田町
広戸	1926(大正15)	1,500	長野県北佐久郡小海町
平穩第一	1926(大正15)	10,200	長野県下高井郡湯田中町平穩
平穩第二	1926(大正15)	5,000	同上
平穩第三	1927(昭和2)	480	同上
里島	1936(昭和11)	3,300	長野市西長野字里島